

円勝寺跡・成勝寺跡・岡崎遺跡 発掘調査現地説明会資料

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

2015年12月26日

所在地：京都市左京区岡崎円勝寺町（京都市美術館敷地内）

調査期間：2015年10月13日～2016年2月29日（予定）

はじめに

この調査は、京都市美術館再整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の第2期です。今回の調査区は、美術館敷地西部に位置し、昨年度に行った第1期調査区の南側にあたります。調査面積は約1250㎡です。

調査地は、平安時代後期に開発された白河街区の中心地域にあたり、天皇や皇族によって造営された六勝寺の内、円勝寺（1128年、待賢門院の御願寺）と成勝寺（1139年、崇徳天皇により造営）の跡地に推定されています。また、弥生時代から古墳時代の集落跡である岡崎遺跡にもあたっています。

第1期の調査では、弥生時代から江戸時代の各時期の遺構を発見しました。弥生時代から古墳時代の遺構には、溝や土坑、自然流路があり、遺物の出土状況および周辺の調査成果から、集落跡が調査地点の北西部に想定されています。平安時代後期から鎌倉時代の遺構には、溝や築地、井戸、柱穴、土坑があります。南北方向の溝は円勝寺と成勝寺を区画する溝と考えられ、溝の東側に南北に並ぶ柱列は塀跡と考えられています。調査区北端で検出した東西方向の築地は、寺域北限に相当します。二条大路末の北築地が1991年の調査で確認されていたことから、二条大路末の道路幅が約30m（10丈）であったことがわかりました。

今回の調査成果

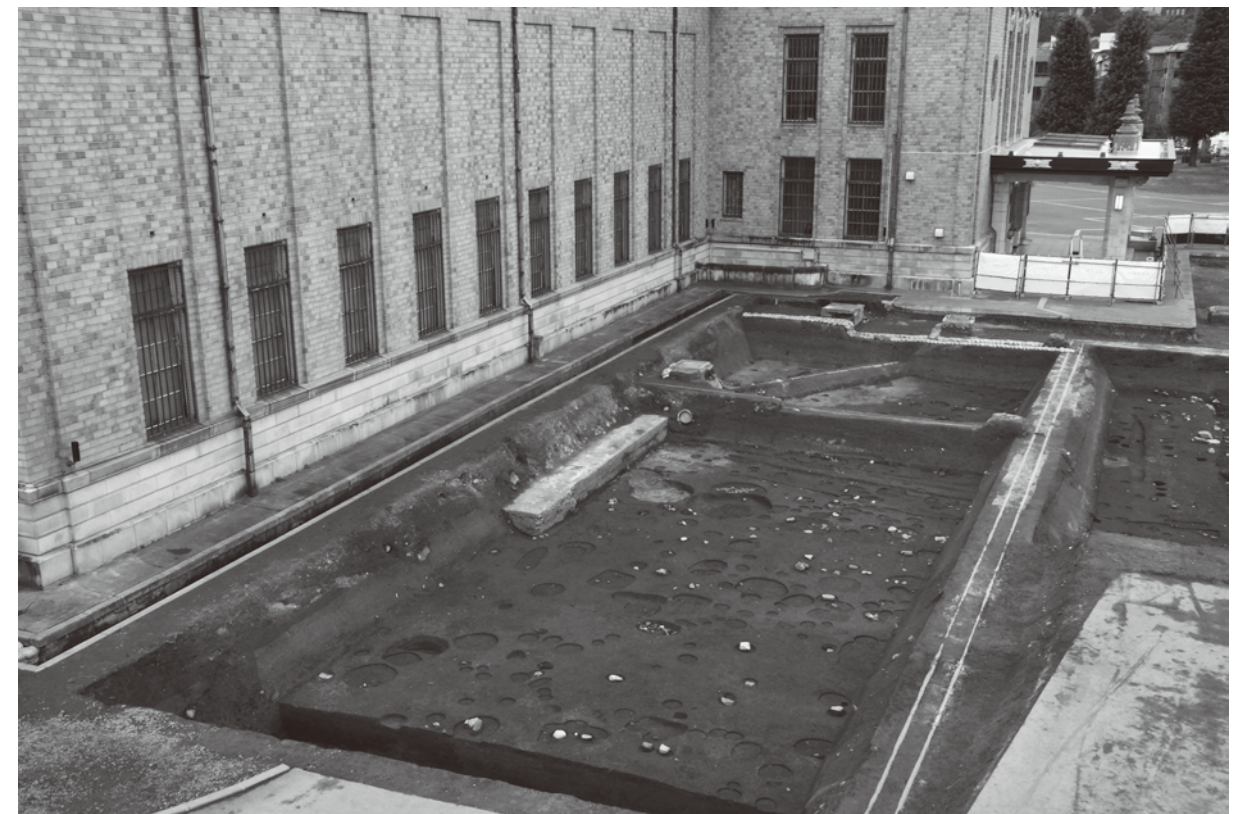
平安時代後期から鎌倉時代の建物、井戸、溝、土坑、柱穴などを確認しました。調査区中央には南北方向の溝（溝900、幅約4.3m、深さ約0.6m）があり、後世に護岸の修復を行っていました。当初は素掘りでしたが、砂などの堆積により溝幅が狭くなった後、両肩口に石を2～3段積み上げて、崩れないようにしていました（溝840）。溝900をはさんだ両側には柱穴列や建物、土坑、井戸などがあります。建物は数棟建ち並んでいたと考えられますが、規模などは不明です。

出土遺物には、土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、瓦などがあります。特に、

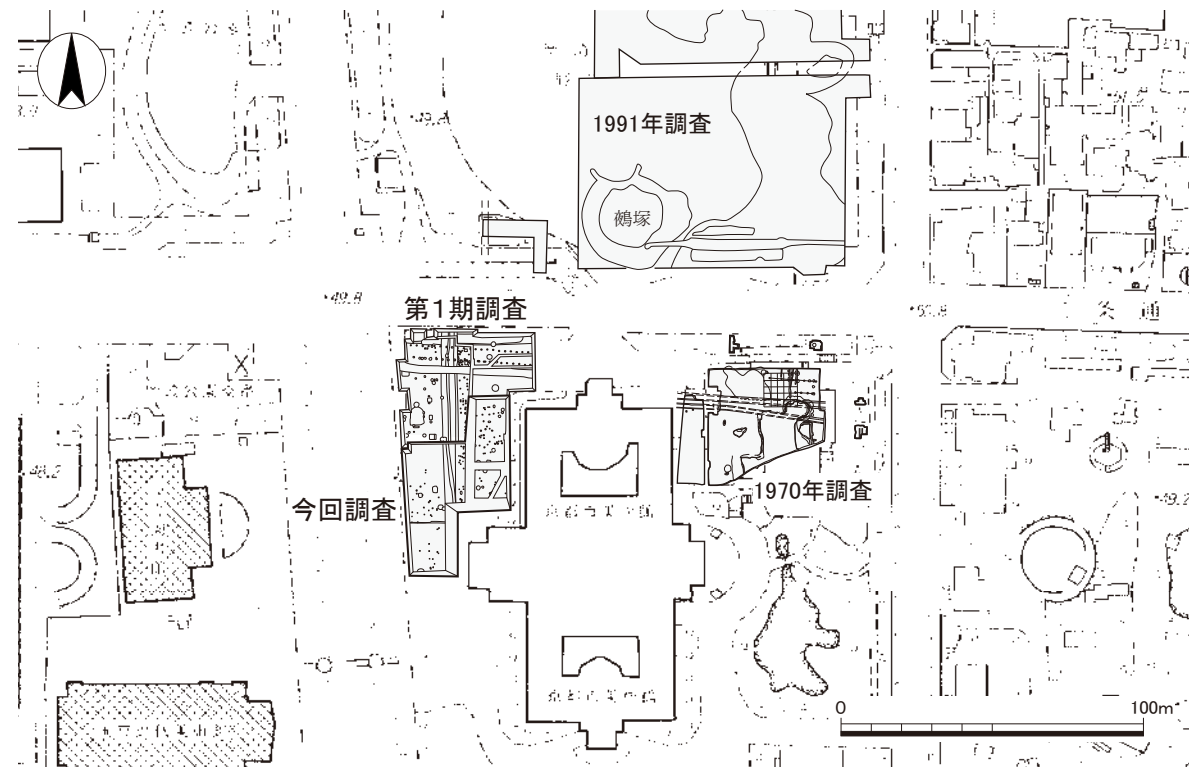
瓦は南北方向の溝900から多量に出土しています。また、調理に使用された瓦器鍋や釜、石鍋も出土しています。

まとめ

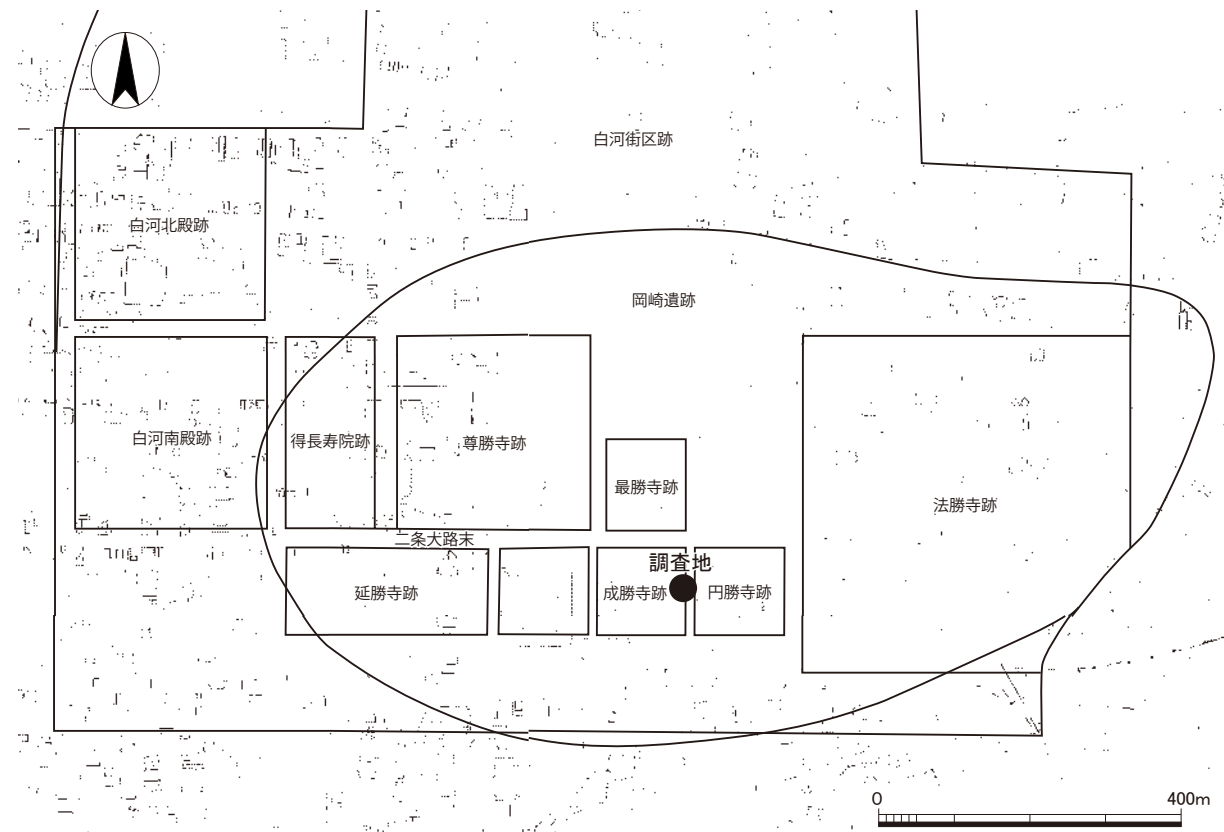
第1期の調査で検出した平安時代後期から鎌倉時代の南北溝の南延長を確認し、修復を重ねながら利用されていたことがわかりました。南北溝900は円勝寺と成勝寺の寺域を限る溝と考えられます。南北溝の両側では建物や井戸、土坑など生活に関わる遺構が分布し、煮炊きに使用する土器など遺物が多く出土していることから、この場所は寺院を維持するために管理していた人々の住まい「雑舎」が建ち並ぶ地域であったと考えられます。本来、雑舎の遺構は、中心伽藍を構成する金堂や講堂などの北側に造られたと考えられていました。今回の調査では、円勝寺と成勝寺は、白河街区のメインストリートであった二条大路末が寺域の北側に位置することから、雑舎の建物を道路に面していない敷地の東西両端にまとめていたということが推定できます。白河街区に造営された六勝寺については、法勝寺（現京都市動物園付近）の伽藍配置がある程度知られているだけです。今後、六勝寺の各寺院内に造られた雑舎の建物配置を考える上で、重要な手掛かりが得られたことは大きな成果です。



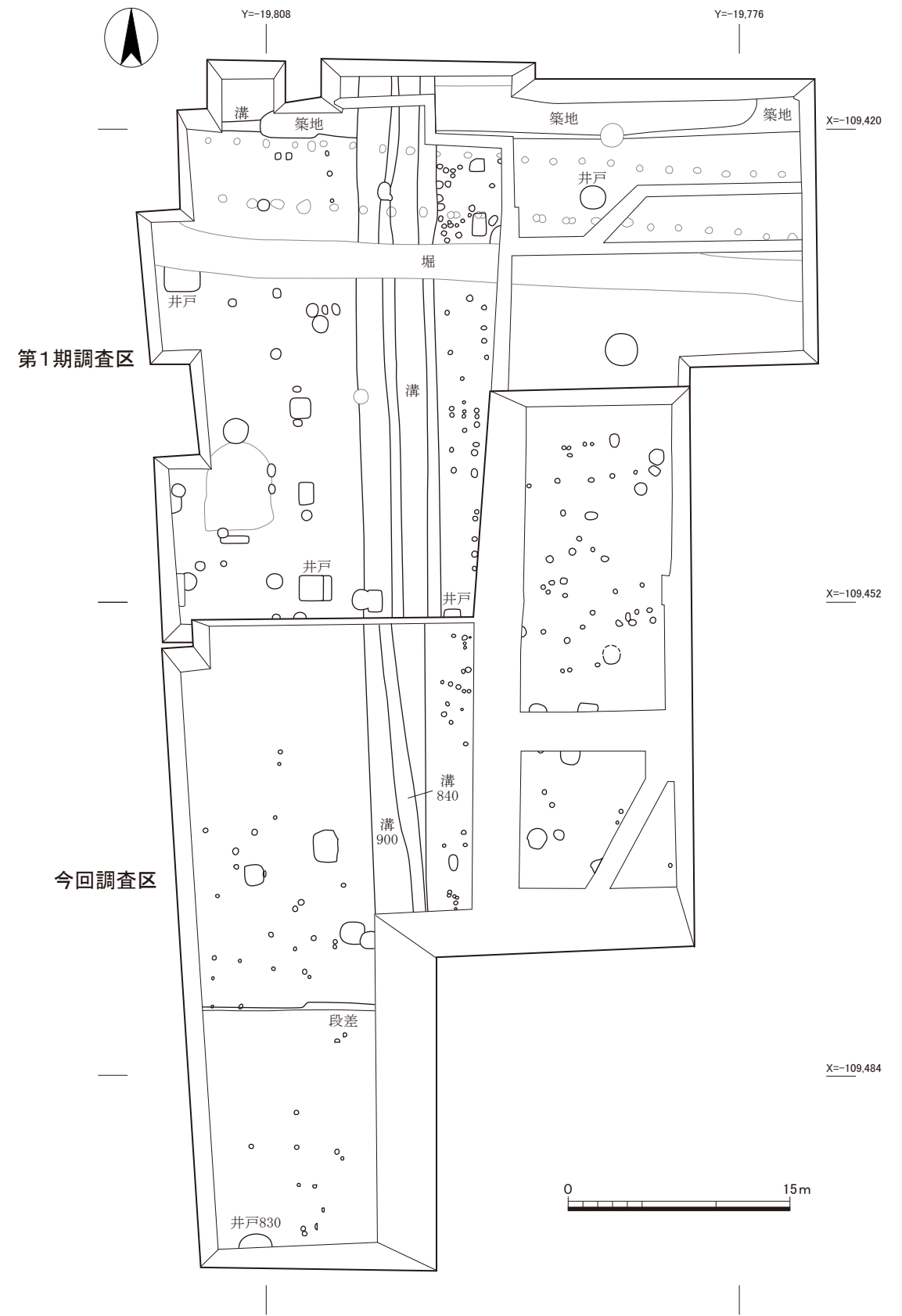
調査区東半全景（北西から）



調査区位置図(1:2,500)



六勝寺跡位置図(1:10,000)



調査区平面図(1:400)